介護Biz

見守りシステム、職員教育に活用

若手中心のプロジェクトチーム発足

加治川の里（新潟県新発田市）が運営する介護付有料老人ホーム「ウェルハート加治川の里」（同聖籠町・平均要介護度2・1）では、エコナビスタ（東京都千代田区）が提供するSaaS（Software as a Service）型高齢者施設見守りシステム「ライフリズムナビ＋Dr.」を全80室に導入。見守りシステムを教育などにも活用しているという。導入時のポイントなどについて、吉田健施設長に話を聞いた。

ウェルハート加治川の里
吉田健施設長

――見守りシステムの導入について。

吉田　2月に全80室にライフリズムナビを導入した。導入を検討した時の印象は、モニターが見やすいため、スタッフが使いやすいだろうと思った。睡眠の質のグラフ化、疲労回復度が表示できるため、ケアの質向上に役立てることもできると感じた。また、クラウド型のシステムであり自社でデータを管理する必要がないため、データが破損する心配がなく、過去データもすぐに確認できる。不具合やアップデート時も対応しやすいことが選定の決め手となった。

――導入時にプロジェクトチームを発足した。

吉田　当施設の職員は平均年齢が36歳と若い職員が多い。仕事を自主的に進めるのではなく、受け身になる傾向があった。職員に自主的に考えて動いて欲しいという考えから、見守りシステム導入時に、若い職員を中心とした約10名のプロジェクトチームを発足。導入後、プロジェクトメンバーが、見守りシステムをどのように活用していくべきか、自分たちで考えて実践し始めた。若い職員が自分たちで考えて、アラートの設定などについて話し合っている姿が見られるようになり、ほかの業務における発言も増えてきた。

――システム活用のポイントは。

吉田　使用時に疑問点などがあるときは、エコナビスタのカスタマーサクセスとチャットで連絡を取っている。全パソコンにチャットをダウンロードし、職員がいつでも質問できる環境にした。気になったときに質問するとすぐに返信してくれるため、疑問点は即座に解決できる。職員の理解度に応じて、操作の方法、画面の見方、アラートの通知など、疑問に思ったことを個々に質問している。履歴も残るため、過去の質問の回答を全員で共有し、Q&A集も作成した。また、導入時に職員らが自発的に利用者の状態、生活を把握しながらアラートを個別に設定した。一人ひとりのポイントを見極めるには、職員が利用者を理解する必要があるため、利用者とのつながりも強くなった。

▲見守りシステムの導入で若手職員が自発的に行動するようになった

夜間巡視廃止も

――導入時にアラートを鳴らさないユニットを作った。

吉田　アラートのメリット、デメリットを考えながら活用して欲しかったので、アラートが鳴るユニット、鳴らないユニットを作った。これにより、アラートが発報する理由を考えながらケアをするようになった。例えば、当施設の利用者は食後、居室で休んでいることが多いが、昼食後にアラートが頻繁に鳴る利用者がいた。調べてみると、こちらの利用者は昼食後に休む習慣がなかったことを把握できた。そのため、居室で休むのではなく、共有スペースで軽作業などの活動をしてもらうことで、本人に適した生活が送れるようになり、職員もアラートが鳴らないため負担が軽減した。

◀利用者とのつながりが強くなりケアの質が向上した

――導入の効果について。

吉田　入居者一人ひとりに対してどのような効果があるのかを細かく分析している段階。現時点では、居室にいる入居者の生活の状態、睡眠状況などの生活リズムを、見える化できるようになったことにメリットを感じる。また、当施設では、夜間勤務者が1回あたりの夜勤で約10㎞近く移動していることが分かった。6月中旬から試験的に夜間巡視を廃止して、どの程度効果が出るのか検証している。これから導入の具体的なメリットを出していきたい。

――今後の展望は。

吉田　ライフリズムナビを使いこなすと、生活リズムの見直しができるようになる。睡眠導入剤の服用者数を減らしたり、容態変化の早期発見、看取り期の適切な対応などができるようになるだろう。利用者には、日中アクティブに活動してもらい、夜はしっかりと睡眠してもらうといった、個々の生活改善につなげていきたい。また、夜間巡視の廃止、夜勤時間の短縮など、職員の業務改善を行っていければと考えている。入居者にとって快適な生活、職員に負担のない労働環境を構築したい。